

# がん治療の 明日 ④

## 家系たどり 体質理解

「やっぱりうちは、がん家系だからねえ」

親族が一堂に会するお盆や正月。しばらくぶりに顔をそろえると、いつの間にか同じ話題になる。

「お母さんは乳がんで、おばあちゃんは大腸がん」

「私たちも、ちゃんと検査を受けたいとね」

その一員である埼玉県の女性(41)にとって、がんのことはいつもなんとなく頭にあった。それを強く意識するようになったのは3年前。三つ上の姉に卵巣がんがみつかった時からだ。

「検査しなきゃと思いつつ、忙しくて行けなかった。失敗

しちゃったな」

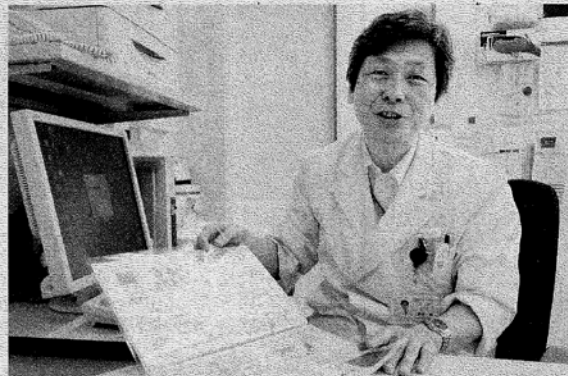
姉の言葉が耳に残った。

姉に付き添って訪れた病院

の医師は、心配していた通りのことを口にした。

「妹さんも、遺伝性乳がん・卵巣がん症候群の可能性があります」

遺伝子BRCA1かBRCA2に変異があると、そうでない人の6〜12倍も乳がんになりやすい。卵巣がんになる恐れも8〜60倍になる。4年前、米女優のアンジェリーナ・ジョリーさんが、BRCA1の変異があり遺伝的に乳がんになりやすいことから、両方の乳房をがんになる前に切除して話題になった。



「遺伝子検査はよく考えてから受けてほしい」と話す埼玉県立がんセンターの赤木医師

この遺伝子の変異は50%の確率で親から子に伝わる。埼玉県の女性が同県立がんセンターで遺伝子検査を受けると、やはりBRCA2の変異がみつかった。

「リスクを減らせるのなら何でもしたい」

女性は都内の病院で卵巣を切除した。すでに2人の子どもを授かっていることも、決断を後押しした。

「母や姉の闘病を見ると、がんになるのが怖かった。がんになるリスクはゼロじゃないけど、今は自分も家族も安心して暮らせる」。わが子が成人する頃には、検査を勧められるつもりでいる。

「遺伝的な体質を知っておけば意識して検診を受けられるので、がんになっても早めに発見できる」。検査を担当した赤木医師は、そのメリットを力説する。

ただ、遺伝子検査に対する受け止め方は人それぞれだ。事実を知ってショックを受けると、怖い。よくない遺伝として差別を受けるのではないか。そんな不安を感じる人もある。伝え方には工夫がいる。

静岡県立静岡がんセンターの遺伝外来の相談室。木目調の壁には風景画、部屋の隅には観葉植物。診察室と分かれた個室は、温かみのある空間になっている。

「きょうだいは何人ですか」「叔母さんはいつがんになったのですか」

カウンセラーがゆっくりと聞き取り、患者の家系図を描

き上げる。血縁者の誰が、いつがんになったかを知ることが、遺伝性のがんを探る基本。判明した時に、親族のたれががんになりやすいかも推測できる。

同センターは「がん家系」を心配する患者たちの相談を受けてきた。遺伝についてかみ砕いて説明し、がん患者に寄り添う専門の遺伝カウンセラーが対応する。

遺伝カウンセラーの堀内泰江さんは「遺伝について理解したうえで本人や家族が納得して検査を受けるかどうか選択することが大切。遺伝情報

のがん治療への活用はまだ始まったばかりなので、まずは正しく知ってもらいたい」と話す。

遺伝情報を使った医療が進展するにつれ、その役割は、さらに重くなっている。